

山崩れの経験

南家久光

昭和三十九年七月十八日十九時、裏山が「ゴーツ」と唸りを上げ崩れた。ちょうどテレビ漫画エイトマンが終わったところだった。「エイトマン」番組が終わる時に一声を上げるのがこの番組の特徴だった。その「エイトマン」と、言ったところでテレビが切れた。一瞬にして停電が起こった。テレビを見ていたのが私と弟だった。母は、台所で夕飯の準備をしていた。母はとっさに、私たち兄弟を抱えて、外に出ようとした。台所は大木で押しつぶされ、部屋から出ようとした私たち家族の目の前を大木が塞いだ。間一髪だった。九死に一生とはこのことを言うのだと後になって思った。また、その時に、母が私たちを瞬時に連れ出そうと、部屋にあがって来たからよかった。そのまま台所にいるか、台所からそのまま外に出ていたなら、大人一人が抱えても足りないような太さの大木の下敷きになっていただろう。その時、父は仕事から帰宅する寸前だった。目の当たりに、山崩れを目撃している。これも、家に入る十メートルくらい手前でのことだった。私の視線の向こうには父の自転車を引く姿があった。一時間に百ミリの豪雨だったらしい。

この時私はもうすぐ誕生日を迎え九歳になるところだった。弟は五歳。父ももうすぐで三十九歳になる頃だった。母は三十三歳だった。

時代は高度成長期に入っており、東京オリンピックが十月に開催される年だった。しかし、我が家は貧しかった。鶏小屋を改造した間借りの借家だった。部屋は一つ。台所は部屋に付け足した庇の下にバックヤードのようにして建てつけてあった。簡単な流しとコンロ、外との境はビニールのようなものが吊るしてあった。洗濯機が内側にあり、壁のような役目をしていた。時折、アオダイショウ（蛇の一種。無毒、全長が1〜2メートル）が、台所の水道管に巻き付いていた。ムカデがよく部屋の中に入ってくる。刺されたことはなかったが、見た目が非常に悪く、何回も嫌な思いをした。その度に、必死で殺した。

屋根はトタン屋根だった。天井がトタン一枚だったので、雨の音がもろに聞こえてくる。記憶では、三日三晩大雨が降り続いていた。山から流れ出る小川の水が茶色く濁っていた。小高い山肌に通いつくばるようになって民家が建っている。そして、屋敷の左端は、羊が一頭飼われていた。いわば、羊とも一緒に暮らしていたわけである。羊の目が四角なことも初めて知った。そして家の前面に小さな道がある。もちろん車が通る幅じゃなかった。

自転車か、バイクがやっとだった。そして、水田が広がる。

山崩れが起きて、私の住んでいる家は台所が大木によって押しつぶされた。幸い居住部分はずぶされずに済んだ。我が家の並びの右側にもう一軒の平屋建てがあった。それはペシャンコになった。老年の女性の一人住まいだったが、たまたま便所に行っていて助かった。実は、我が家と、この女性の共同便所が、双方の家の前に少し離れて建っていた。奇跡というしかなかった。

この山崩れの報道はNHKで放送した。「山陰地方の米子市陽田町の山が崩れ、大きな被害が発生。家屋二軒が全半壊、一人死亡」と言う内容だったらしい。

しかし、けが人や死亡者がなく不幸中の幸いでもあった。

隣のお年寄り、大家さんの家でしばらく過ごされた後、仮設住宅に移られたとか、私の記憶は定かではない。私たち兄弟は、自治会長（農家）の離れと言っても、これも、鶏小屋の二階が、作業場のようになっておりここで待機するように連れてこられた。停電だったので一晩中暗がりの中で夜を明かした。親たちも帰ってこなかった。朝まで、不安を紛らわすために、唱歌や童謡を歌いまくった。歌を歌うことで元気が続いた。次から次へと山が崩壊していったらしい。町内会の大人たちは懸命に復旧作業を続けた。この夜は山崩れの後、一級河川ではないが大きな川が決壊した。私の家からは一キロも離れていなかった。

水田は湖のようになっていたという。後で両親が教えてくれた。町内会の全ての大人たちが、作業で夜を明かした。幸いにも夜が明けると雨が小降りになっていた。しかし、二階の窓から外を眺めると、確かに水田は一面湖のようだった。水は茶色く濁っていた。

朝になると、私の家から自治会長の離れに、被災した部屋から家具など運び込んだ。沢山の人の手を借り、我が家は自治会長宅で落ち着くことになる。そして、幸運にも、鶏小屋をリニューアルし、借家として貸してくれる話になった。風呂はないので、自治会長宅の風呂を使わせてもらう。自治会長宅は老夫婦の二人暮らしだった。屋敷が広く、私たち家族四人を快く迎えてくれた。

一か月後リニューアルが完成。それまでは二階の作業場で過ごした。仮設住宅が出来たので入居するようにとの市からの依頼があり、家族で見学に行った。しかし、自治会長の行為に甘え、鶏小屋をリニューアルした一階部分の部屋に移り住むことになる。

小学校は夏休み前だったので欠席し、そのまま夏休みに突入したと記憶している。「夏の友」（当時の夏休みの宿題）とかは、担任の先生が持参されたのではないかと思うが、記憶が定かではない。ただ、二学期に出席した時、災害見舞として鉛筆を何本かもらった（災害助け合いの団体からだったと思う）。この時不思議な思いに駆られた。自分が大変な災害にあったのだと改めて感じた。

ところで、災害があつて一週間したころの話に戻るが、天気は回復し、梅雨が明けた。子供心に、山崩れの現場を探検したいと思い、歩き回った。元あつた我が家の裏山は大きく崩れ、岩肌があらわになっていた。かつて、琵琶の木や無花果の木があつた。木に登つて遊んだ思い出の木々は、全てなぎ倒されていた。また、別なところでは、厚さ一メートルもある土砂がたまり、それが山の麓を囲むように続いていた。足を踏み入れるとズブズブとはまり、身動きできなくなる。

当時、子供心に、「こんなのが自分を襲つたのなら、埋もれてしまい息もできない」とため息を漏らしたのを覚えている。恐怖に駆られた。山崩れの恐ろしさを再度噛みしめた瞬間だつた。

夏が終わる頃復旧作業が始まつた。セメントで崩れた山肌が固められた。その光景は、何か異様なものを私に与えた。かつては、家の裏山で遊んだ。その山が無くなってしまつた。琵琶の木や、無花果の木がもうない。知らない木の苗がコンクリートの狭間に、整然と植樹されていた。

水をかぶつた水田の稲はすべて廃棄された。農家は大きな経済的損失があつたと思う。決壊した川もコンクリートの川に生まれ変わった。私は、住んでいた一帯が大きく変化したのを感じた。

その夏の花火大会は中止になつた。私の記憶の中では、米子市の花火大会が中止になつたのはこの年だけだつたと思う。水害で、人的被害はなかつたものの、経済的には大きかつた。

そして、私たち家族も住まいが変わり、また違った生活が始まつた。今度は、リニューアルされた鶏小屋だつたから、新築の匂いがした。窓を開けると、すぐ小川が流れていた。山崩れのあつた家は、窓を開けると、すぐ裏山だつた。山の中にある家という環境から、小川のほとりにある家という環境に変わった。

小学六年生の夏まで、この家にお世話になつた。